

黒田龍之助著「語学はやり直せる！」角川 one テーマ 21、角川書店 2008 年 2 月 10 日刊を読む

理想の語学教師を求めて

## 1. 楽しくなければ語学じゃない

楽しかった先生 - 中学時代の K 先生 -

(1) 中学校を卒業して 30 年近くなるし、その頃の記憶もあいまいになってきた。それでも英語の K 先生のは今でも忘れられない。

(2) 非常に印象的な先生だった。教え方がうまかったとか、親身になってくれたとか、そういうのではない。

(3) なんというか、奇妙な先生だったのである。

(4) 体育会系肉体派の K 先生は、体を鍛えるのが大好きな、ごつい中年男だった。運動会ではリレー競走に真剣に参加する。背筋を丸めた生徒は見つけ次第ただちに背中をドツク。保護者会で K 先生を見かけたうちの母親は「農業の先生かと思った」(そんな科目あるか!)。休み時間にはどんなに寒くても、窓を開けて空気を入れ換えることを要求した。同じことを教員室でもやって、年配の先生たちからは嫌われていたようだ。でも、そんなことを気にかける K 先生ではなく、いつも大声で豪快に笑っていた。

(5) わたしとはおよそ生き方の違う K 先生だったのだが、嫌いではなかった。むしろ、授業が楽しみだった。

(6) 授業でやることはただ一つ。

(7) 「<sup>あんしように</sup>暗誦！」

(8) 毎回の授業は暗誦テストから始まる。前回学習したテキストを、何も見ないでノートに書く。それだけ。制限時間は 5 分くらいで、それから答え合わせ。間違いは 1 つか 2 つくらいまでは許されるけど、それより多いと、なんと体罰！

といっても「自分で自分の頭をゴチンとやれ！」とか「その場で腕立て伏せ！」みたいなもので、陰湿さはまったくなく、クラス中がゲラゲラ笑っていた。ふだんから成績のあまりよくない生徒が多少できたら、たとえ 3 つ以上間違えていても大声で誉めるなど、それなりに気を遣っていたのである。

(9) 暗誦のあとは、おざなりな授業を 10 分ほどやって、あとは雑談ばかり。これがまた独特で、痴漢防止のための護身術とか、腕相撲に勝つ方法とか、訳の分からん話を機嫌よく語っていた。

授業時間が終わりに近づけば「じゃ、今日やったところを次回までに暗誦！」で、この繰り返し。今だったら保護者からクレームがつくのではと、心配になる。

(10)でも、K先生に習うと英語力は間違いなくついた。

(11)その秘訣はいたって簡単。暗誦することと楽しいこと。初歩の語学はこれだけで充分。とくに中学生なんて、少なくともわたしたちの頃は、幼いというかサルみたいなもので、こうやって躰<sup>しづ</sup>けられていくうちに、英語が身についたのである。

(12)毎回必ず宿題が出るのだが、それは「今日やったところを5回ずつノートに書いてくるように」という、非常に具体的な課題。これさえやれば、自然と暗誦できるようになる。

P116 ~ 118

## 2. 黄金律は「発音のよいこと」

(1)もう少し、語学教師にとっての、語学そのものについて考えよう。

(2)語学教師は語学そのものができなければならない。基礎的な知識がなければ、教えることは不可能である。そりゃまあそうだろう。ただし、これは語学に限ったことではなく、どんな科目でもいえることだ。

(3)だが語学に求められるのは、知識だけではない。さらに実技が求められる。これが他の科目と決定的に違うところであり、語学教師に負担が多い理由でもある。

(4)ふつうの科目は、知識か実技かのどちらかに重点が置かれる。歴史や地理は知識が中心となる。音楽や体育は主に実技だ。

(5)語学の場合は、文法とか語彙といった知識はもちろん重要である。しかし、それだけでは足りない。実際の運用能力もまた期待されている。つまり、両方のバランスが大切になってくる。

(6)その中でも最重要は発音である。

(7)10年以上も前になるが、旧ソ連のある共和国で、年配のロシア語教師と会った。長年の経験を有するベテラン女性で、穏やかな話し方の中に、専門家として教育に携わってきた自信と威厳が感じられる。

(8)わたしが自己紹介を一通りすると、彼女はにっこりしてこういった。

「あなた、ずいぶんがんばったわね。いまの自己紹介、文法の間違ひは1つも無いし、発音もすばらしいわ」

「ありがとうございます。でも、ロシア語教師ですから」

「そうね。教師は発音がいいこと。これは黄金律よ」

- (9)こんなに嬉しいコメントをいただいたことは、後にも先にもこれしかない。
- (10)学生時代、発音はとくに時間をかけた。ロシア語の先生は厳しい人で、なかなか合格点を出してくれず、かなり絶望的な気持ちになることもあった。それでも努力を続けていれば、だんだんと滑らかな発音になってくる。そう信じて練習を繰り返した。
- (11)語学教師なら誰でも、発音がよくなるように努力しているだろう。だが、全員がうまくいくとは限らない。発音は身体能力のようなもので、個人的な限界を抱えている人だっている。それでも努力しつづけるしかない。少なくとも「どうせわたしは発音がダメなんだ」と開き直ってしまう語学教師は困る。
- (12)発音と並んで、語学の実技には会話がある。この会話こそ、個人差がさらに大きい。そもそも母語でも、無口だったり、話ベタだったりする語学教師もいる。努力はしてほしいが、全員がペラペラになることはない。
- (13)だが、発音は違う。日本人の語学教師で、相手に理解できないほど日本語の発音が悪いというのは、ちょっと考えられないのではないか。だったら外国語の発音も、少なくともネイティブが理解できる程度は、何としても目指さなければならない。
- (14)発音については、生徒の評価も厳しい。自分は口々に声も出さないのに、教師の発音だけはしっかりと聴いていて、根拠のない感性のみを基準にして、上手いとか下手だとか噂する。そういうとき、あの先生は発音はイマイチだけど、語学力はすごいと尊敬されることは、めったにない。反対にうまい発音は、たとえ他の知識が多少は劣っていても、生徒を納得させる。こういう生徒を黙らせるには、発音で圧倒するのがいちばん。
- (15)実技が問われる科目を教えるのは、負担が大きい。でも、音痴な音楽教師というのは考えにくいし、字の下手な書道教師もまずいだろう。体育なんて、すべての種目を一人で全部こなさなければならない。中には泳ぐのだけは不得意だとか、何らかの苦手を抱えている体育教師だっているだろう。その中で、語学教師だけが、発音がダメで会話が苦手では、済まされない。
- (16)どの教師もがんばっているのである。

### 3. 文法用語を乱発しない

- (1)発音や会話という実技に対して、知識の代表は文法である。その言語の構造が正確に理解できていなければ、運用することだって当然できない。
- (2)だが、語学教師にはさらに求められることがある。それは分かりやすく説明ができることだった。それに加えて、もう一つ大切なことがある。
- (3)生徒はどこが分からないのか。それを推察する能力が語学教師には必要なのだ。

- (4)これは初級ほどそうだろう。相手は子どもに限らず、社会人向けの語学講座でも同様である。分からないことがありますかと語学教師が尋ねて、理解できない箇所をすぐに指摘できたのなら、その生徒には問題がないどころか、むしろ優秀だ。ふつうは「何が分からないのかさえ分からない」のである。
- (5)だから語学教師は、生徒がどこでつまづいているのか、よく見極めなければならない。それを前提として、分かりやすい説明を工夫するのである。
- (6)多くの生徒がつまづく原因に、文法用語がある。  
「一般的な文の語順は主語 + 動詞で、動詞の後には、補語や形容詞、目的語などが置かれる」
- (7)この説明は、わたしにとっては非常に明快なのだが、人によっては補語や目的語といった文法用語を見て、その違いは何だっけと、少々不安になるかもしれない。  
「『誰が～する / ～している』という意味にするには、動詞を人称と数に応じて変化させ、動詞の現在形を作らなければなりません」
- (8)人称と数が何を意味するのか分からなければ、まずピンとこないだろう。  
「名詞には男性名詞、女性名詞、中性名詞の 3 種類があり、おのおのに単数・複数と不特定・一般の概念を述べる不定形と話し手・聞き手の両者間ですでに了解が成立している特定概念を述べる定形とがあります」
- (9)これくらいになると、いちど読んだだけでは、なかなか頭に入ってこないかもしれず、何度か読み返す必要がある。
- (10)ここに挙げた 3 つの例は、いずれも英語以外の語学入門書の、しかも第一課から選んだものだ。長い説明の一部だけを取り上げているので、その点は差し引かなくてはならないが、それにしても特に最後の文は、日本語としても少し長すぎはしないか。
- (11)だが、問題は日本語表現よりも、文法用語であろう。
- (12)語学は文法や語彙を学ぶだけでなく、その概念もあわせて理解しなければならない。それに伴って、名詞とか動詞とか、さらには過去完了進行形といったような、なんだか恐ろしげな用語も身につけなければならない。この恐ろしげな用語が、文法嫌いを作る原因になる。
- (13)この文法用語を、なんとか分かりやすくすることはできないか。
- (14)わたし自身は、文法用語をなるべく使わないようにしている。語学は言語を習得することが目的であり、文法用語なんて、本来は言語学の専門家だけが知っていればいいもの。さらに評判がよくないのだったら、できるだけこれを避けたいではないか。

(15)しかし、まったく使わないわけにはいかない。用語を使わずいちいち説明していたら、まどろっこしいことこの上ない。それに参考書その他には、こういう用語が満載である。それを知らなければ、この先自分で調べることができない。

(16)この矛盾は永遠に解決しないだろう。その場その場で、妥協しながら説明していくしかない。

(17)ただ「この生徒が理解できないのは、もしかして文法用語が分からないからではないか」ということは、いつでも頭の片隅に置いてほしい。

(18)さらに「そんな基本的な文法用語も知らないのか！」と叱らないでほしい。そうでなくても、学習者は文法にビクビクしているのだ。

P130 ~ 136

#### [コメント]

理想の語学教師を求めて行うべきことは多い。暗誦、発音、文法の説明。これだけでも随分参考になる。語学教師の必読書。

- 2010年9月24日 林 明夫記 -